

阿弥陀さまって どんな方？

● 目次 ●

はじめに——浄土宗のご本尊・阿弥陀さま

1 仏さまはひとりじゃない!?

- ① 仏教を開いたお釈迦さま……………3
- ② たくさんの仏さま、菩薩さま……………6
- ③ 仏さまと仏国土……………8

2 阿弥陀さまのプロフィール

- ① 青年国王、志を立てる……………9
- ② 四十八の誓い——本願とお念仏……………10
- ③ 「阿弥陀」の意味とその功德……………11
- コラム 十八番(おはこ)……………12

3 キーワードから学ぶ阿弥陀さまの教え

- ① 俱会一处……………13
- ② 回向……………15
- ③ 三心……………15
- ④ 三縁……………16
- ⑤ 阿弥陀三尊……………19
- ⑤ 九品の印相……………19
- ⑥ ご来迎(らいこう)——お迎え……………23
- コラム 宗歌「月かげ」……………21

おわりに

はじめに——浄土宗のご本尊・阿弥陀さま

私たちの身近には多くの仏さま・菩薩さまがいらつしやいます。道端に佇むお地藏さま、各地の霊場にもよく祀られていて観音さまなどをはじめ、お寺や家庭のお仏壇に祀られている仏さまや菩薩さまにはたくさん種類があります。そのため、それぞれの区別がつかない方も少なくないかもしれません。

かまくらや みほとけなれど 釈迦牟尼は

美男におわす 夏木立かな

歌人の与謝野晶子（1878―1942）は、鎌倉の大仏さまをこう詠みました。でも、鎌倉の大仏さまは実は阿弥陀さま。これを小説『山の音』の中で指摘したのは、川端康成（1899―1972）でした。大仏さまは、そのま「大仏さま」として親しまれていたことが、晶子に勘違いをさせたのかもしれない。ややこしいのですが、同じ大仏さまでも、奈良の大仏さまは毘盧遮（舎）那仏といえます。東西で有名な二つの大仏さま、確かにどちらも「大仏さま」ではあるのですが、違う仏さまなのです。

芥川龍之介（1892―1927）の小説『蜘蛛の糸』には、お釈迦さまが登場します。

——極楽浄土の蓮池のふちを歩いてたお釈迦さまが、その池の水を通して遙か下界をご覧になると、多くの罪人がさまざまな罰ばつを受けているのが見えまして。その中、地獄の底の血の池でカンダタという男が苦しんでいます。この男は多くの悪事を働いた大泥棒おどろぼうですが、生前に蜘蛛に情けをかけて助けたことにより、お釈迦さまが蜘蛛の糸を垂らして地獄から救い出そうとされる……というお話です。しかし本来、極楽浄土にいらっしゃるのはお釈迦さまではなく阿弥陀さま。小学校の国語の教科書にも載っていた有名な短編ですが、きつと授業ではそんなことまでは教わらなかったでしょうね。

ほかに、「牛に引かれて善光寺参り」の信州善光寺（長野市）、世界遺産に登録された中尊寺金色堂ちゆうそうじんじこんじきどう（岩手県平泉町）などにお祀りされているのも阿弥陀さまです。ご存じでしたか？

浄土宗でご本尊と仰ぐ阿弥陀さま。この小冊子は、その阿弥陀さまについて、「仏さまって、たくさんいらしてよくわからない」という方にも理解していただけるようにポイントをまとめたものです。私たちの仏さま——阿弥陀さまをあなたのそばに感じていただければ幸いです。

1 仏さまはひとりじゃない!?

① 仏教を開いたお釈迦さま

今からおよそ二千五百年前、仏教はお釈迦さまによって始まりました。日本では「お釈迦さま」と呼ばれ親しまれていますが、正しくは「釈迦牟尼世尊」^{しゃかむにせそん}「釈迦牟尼仏」^{しゃかむにぶつ}といえます。「釈迦牟尼世尊」は「釈迦族出身の聖者」^{せいじゃ}の意味、略して「釈尊」^{しゃくそん}とも呼ばれます。

お釈迦さまは「ブッダ」となられた方です。ブッダとは古代インドの言葉で「修行を完成させ真理に目覚めた人」^{おん}の意味。この言葉の音を中国で漢字に当てたのが「仏陀」であり、日本では通常、上の一字を訓で「ほとけ」と呼んでいます。本書冒頭で、仏さまには多くの種類があると記しましたが、それは皆ブッダであり、そのうちのお一人がお釈迦さま、ということになります。また、仏さまのことを「如来」^{らい}とも言いますが、これは仏陀と同義に理解して差し支えありません。

お釈迦さまの本名はゴータマ・シッダールタ。現在のネパール領ルンビニーで釈

迦族の王子として誕生されました。シッダールタ太子は、二十九歳で出家。なぜ王族の地位や生活、家族・妻子を捨ててまで出家の道に入ったのでしょうか。

シッダールタがまだ幼かったある日、樹の下に座って畑を眺めてみると、土の中から虫が這い出てきて、それを小鳥が飛んできてついばむのを目にしました。さらに、大きな鳥があつという間にその小鳥に襲いかかりました。ほんの短い間に目の前で起こった出来事に、太子は互いに食み合う生態系の現実を見たのです。そして自分自身も他の命を奪うことによって自らの命をつないでいる事実に、強く無常を感じたと言われています。

こんなことも伝えられています。ある日、シッダールタ太子が城の東門から出ると、腰の曲がった老人が杖について歩いているのを目にしました。別の日に南門から出ると、倒れてもがき苦しんでいる病人を見ました。また別の日に西門から出た時には、人々が嘆き悲しみ死者を送り出す葬列に出会いました。今は健康で幸せな自分もいつか迎えなければならぬそうした姿を目にし、逃れることのできない苦しみで心がいっぱいになり、思い悩みます。

生まれてきた自分の命は、生まれる苦しみ（生苦）、老いる苦しみ（老苦）、病め